

東北大学 東北アジア研究センター ニュースレター

The Newsletter **CNEAS**

第8号

● 目次 ●

論点：「中国」を「地域研究」する	1
萬華鏡：“KGB”での2日間	2.3
Area Report [SIGNAL]：「ロシア」・「モンゴル」・「中国」・「韓国」	4.5
日本館便り	5
最近の共同研究会から	6
センター動向	6.7
モンゴル文字コードについて	7
活動風景	8

「中国」を「地域研究」する

東北大学 東北アジア研究センター教授 **山田 勝芳**

広大な「東北アジア」にあって、高度な大文明を長期にわたって維持してきたのが「中国」である。「中国」はそれ自体一つの「世界」とも呼べるほど広く、奥深い。地域ごとの差異は極めて大きく、言語・民族・民俗状況も複雑であり、「市場経済」の浸透度の違いも大きい。過去を踏まえて、現状を見据え、将来を考える「地域研究」が対象とする地域の中では、最も歴史的、かつ複眼的な調査・思考を要求され、いわば、文化や歴史の厚みに対する認識なくして容易に切りこめない地域なのである。

今日、文学・歴史学等々、中国を研究対象とする学問諸分野では、ほとんどなんらかの形でフィールドワークが行われるようになってきている。しかし、調査・研究によって地域総体のあり方をいかに把握し、将来を見とおすかという点では、個別的すぎるといえよう。総合的・学際的研究を不可欠とする「地域研究」こそが、その役割に任ずるべきである。その意味で、本センターの基幹3研究部門が「交流」「形成」「環境」を掲げていることの意味は大きい。地域の「形成」は不断に進むものであるが、それには地域間、地域内各地域の相互「交流」が大きく関わり、自然的・社会的「環

境」が大きく影響する。

「中国」という地域の現状は、それ自体複雑かつ長期的な「形成」の結果なのであり、今後も不断に「形成」されていく。しかも、その「形成」に伴う諸変動は、日本を含む東北アジア全域に直ちに影響する。「中国」は、人文社会科学と自然科学の連携・融合によって、総力をあげて「地域研究」すべき対象なのである。このように、「中国」を「地域研究」することが21世紀の日本、東アジア、世界にとって、喫緊の課題となっていることは、多言を要しない。

このような巨大でかつ重要な対象地域の研究を、いかに組織化し、研究成果としての「知的資産」を蓄積し、それらの「社会還元」や「国際的共用」を実現していくか？さらには遂行される学術研究が東北アジア地域の「共生」にいかにか寄与できるか？「中国」一つをとっても、やるべきことは多い。2001年5月で満5年となる本センターは、まさに正念場を迎えたという感がある。関係各位・各方面のご協力なくして、本センターの研究業務遂行はできないということを、改めて考えているこのごろである。



“KGB”での2日間

東北アジアセンター 教授 佐藤 源之

本稿の発表についてはセンター内部の教官から多くの意見をいただいた。私が直接目にした事実のみの記述をこころがけたが、個人の見解であることには相違ない。ニューズレターでの公表はセンターを代表する意見という意味ではなく、私個人が2000年9月に公務として行った研究活動に関する事柄であること、またロシアに関係する研究者に事実を伝えたいからに他ならない。本稿中で旧称“KGB”を使っているのはいずれもロシア人が口にした場面である。

1. プロローグ

バイカル湖に沈む赤い夕日を眺めながらロシア科学アカデミーの小さな観測所で夕食を終え、ウラン・ウデのホテルに向かうべく我々はバンで出発した。同行6人はロシア、アメリカ、ドイツ、イギリス、フランス、そして私のいずれも大学教授で4日間にわたるマイクロ波リモートセンシングによるシベリア森林観測ワークショップでの講義のためにロシア科学アカデミーから招聘されていた。木造の小さな民家が並ぶ漁村をバンは通り抜けていく。日本、ドイツ、ロシアから参加した我々の学生は別のバスで既にホテルに着いているはずである。プリアート族の伝統に従い町に差し掛かる前の峠でコインを投げて道中の安全を感謝し、間もなくホテルというところから、すべてが始まった。

2. 9月14日

街に入る直前、夜8:30頃、検問所で車を止められる。周囲は既に完全な暗闇。突然男がやってきてアメリカの先生が無理やり降ろされ別の乗用車に押し込まれ、代わりに男3人がバンに乗り込んでくる。運転しているロシアの先生の隣に座った男は、乗用車について行くよう指示する。ロシアの町はずれで検問所は何度か経験しているが、全く状況が違う。乗込んできた男はしばらくして自分から“KGB”だと英語で言う。現在ロシアに“KGB”は存在しないが、これに代わるFSB(Federal Security Bureau)が活動を続けている。車が街に来たことはわかるが、暗闇でどこにいるかははっきりわからない。ゲートを入れて建物の横を通り抜け駐車場に入る。建物の中にすべての荷物を持って入るように指示される。小さな部屋に入って座らされると、いきなり若い男が、我々に黙秘権のあること、弁護士をつける権利があることなど話し始めたものだから、一同事態の異様さに気が付く。ドアが閉められ、何が起きたか全く理解できない。しばらくしてから通訳がGPS(カーナビなどで利用されている電波で現在位置を正確に知る装置)が問題だと漏らし、そのうち部屋にいる調査官もGPSのこ

とに触れる。しかし調査官以外の若者はGPSとは何か、何に使うものか、どんな形をしているかと我々に逆に質問してきた。

そのうち、一人ずつ別の部屋に行くように指示され、お互いの状況がわからなくなる。夜中の12時を回っていたと思うが、私の番が来て隣の取調室に。調査官は25才くらいの青年。彼は英語がある程度わかっているのだが、通訳を介してしか話をしない。プリアート人の通訳が英語に訳す。取調官は、再度黙秘権があること、必要であれば弁護士を呼べることなどを説明する。こちらは慎重に言葉を選んでしたが、取調べは穏やかである。いつ入国して、何をしていたのか、誰といたかなどを聞いていく。ここで初めて、我々がGPSを使って必要以上に精密な地理情報を収集しているという容疑内容を明らかにした。質問は研究プロジェクトやロシア研究者との接触に絞られており、私の知らない町の名前を挙げ、そこに行ったことがあるかと尋ねる。またGPSをどこで誰が使っていたかということを繰り返し尋問する。ワークショップの会期中、GPSは誰も使っていない。通訳は初めて“KGB”に来てExcitingではないかと取調官のいない合間に問い掛けてくる。時間が経っても質問はさして進展せず、後で記入するから白紙の調書に署名しろと言うので拒否をする。すると後は明日にしようと言う。通訳は学生で、今夜7時に来るように連絡を受けたというから、FSBは我々の行動をよく把握していたことになる。夜中3時に取調べを終え、学生が居るはずのホテルの場所を聞くと目の前だという。取調官が車で連れて行くというので少し警戒して通訳にも来てもらうように頼む。PC、ノート、スケジュール帳は取り上げられた。モンゴルで泊まったホテルの部屋番号と電話番号をメモした紙を大事そうにしまっている。説明したがGPSの記録と疑ったのだらう。

正面玄関から外に出ると、我々が街の真中にいたのに驚いた。確かにホテルはレーニン広場を挟んだ目の前だった。学生は検問さえ受けずホテルに到着していた。我々は電話を許されなかったが、夜中になってから学生には居所が知らされていたらしい。この時点でフランス、イギリスの先生2名はホテルに戻っていた。彼らはPCを持っていなかった。他の3名の状況は依然わからない。

3. 9月15日

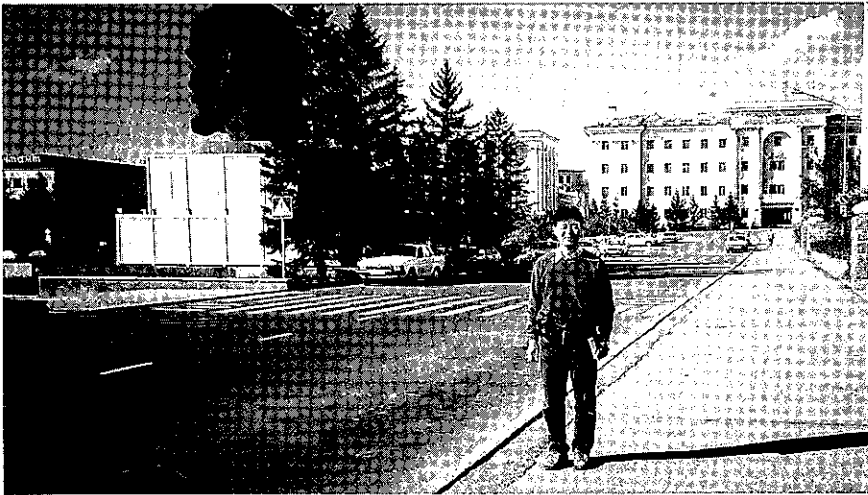
朝になって6名はホテルに戻っていたことがわかる。4名は荷物を取り上げられており、取調べが続く。GPSにだけFSBが興味を持っていることが明らかになり、我々に直接身の危険が及びそうではないことが分かる。私は一人で朝10時に歩いてFSBに向かった。昨夜と同

じ取調官と通訳が昨夜と同じ取調べを繰返ししながら調書に記載していく。昼過ぎまで同じことをゆっくりやっている。PCの中身をチェックする検査官が他の先生のPCにかかりきりでまだ来られないというので、3時に再出頭することにする。調査官と一緒に食事をしようと誘ってくる。

3時に再出頭。検査官がPCのファイルを調べたが、リモートセンシングデータもGIS(地理情報システム)も入っていないと説明したらもういいという。最後にPCは返却されたと書いてある証書に署名をさせ、取調官はこれで容疑は全て晴れたから調査を終えたと宣言した。調書を読み返し、これでいいかと聞くからだめだと答えた。我々6人がロシア科学アカデミーに招聘されたこと、ロシアの研究者を対象にリモートセンシング技術がいかにシベリアの環境保護に重要であるかについて講義をしに来たこと、GPSが環境研究にいかに重要であるか認識しなければいけないことを調書に書かせた。それも書くのかと問い返してきたが、書いてくれと言うと拒みはしなかった。FSBの建物の外まで検査官、通訳は見送りに出てきて個人的には申し訳なかったと英語で言う。確かに張り切って調査をした彼は任務に忠実なだけである。

4. エピローグ：これからの国際共同研究のために

夕方、とりあえず6人の取り調べは終了した。ようやくお互いの状況がわかった。我々の荷物からGPS装置が発見さ



ウラン・ウデの中心レーニン広場にて。後方の白い建物がFSB。

れていたとのことである。この装置は外国研究機関から我々以外のロシア研究者が合法的に輸入し、メンバーの一人が一時的に借用していた物である。この装置の使用許可の更新をロシア人所持者が怠っていたとのことであり、これについて罰則を受けることに異議はない。またロシアの先生は今後も取調べが続くことになり、すべての所持品は取り上げられたままである。ロシアの重要な研究パートナーである彼の今後の研究に障害が起こることを我々は強く懸念している。

ロシアへのGPS持込が厳しくなったことは国内のロシア環境研究者の集まりなどで既に何度か耳にしていた。GPS持込に許可の要ることを知っていたから、私は今回の旅行で所持していたGPSカメラをモンゴルからのロシア入国前に、モンゴルの知人宅に預けていた。

大変残念なことだが今回の事件は2日間ですべてが終わる

どころか憂慮すべき事態は今も続いている。我々6人と同行の学生は10月20日までに全員自宅に戻ったがFSBの取調べが終了していないとの連絡はe-mailで引き続きもたらされている。アメリカの先生はロシア国内の研究者と多数面会した後モスクワから出国したが、ロシア人からのお土産など大部分が没収された上、いくつかの資料は返却されていない。また彼が所持していたノート、ファイル類はすべて我々がFSBに拘留されている間にコピーされたことは、彼のノートにすべて手書きでページが振られたことから明らかである。またワークショップ後ロシア国内で地理情報データ取得のため現地調査を続けていたドイツ人学生3人はロシア滞在中に改めてPCを取り上げられた。

GPSは我々環境研究者にとってもはやなくてはならない装置である。詳細な地図の所持に許可が必要なのはロシアだけではないが、ロシア国内でもロシアの精密地図は販売されている。GPSに対する制限は地理・地質・自然環境を対象とする研究分野に重大な障害をもたらしている。シベリアの森林で起きた森林火災現場を現地で特定するためにGPSは計り知れない力をもっている。ロシアの健全な開発や自然保護を主な目的とするリモートセンシングの分野において、GPSの制約はロシア国内の研究レベルを他の国に比べて著しく遅らせる原因の一つになりつつある。またその取締りの無意味さに気が付くべきである。GPSを装着した中古日本車がFSBの前を通行するのを我々は目撃している。

FSBで我々が直接接したのはいずれも30歳前の優秀そうな若者であった。彼らは自分で時に本音を漏らしていたように取調べはFSBに入って初めての体験だったようだ。夜中にもかかわらずこうした若者が所内には大勢仕事をしていた。“KGB”の復活が大統領選挙前後から話題になっていたが、その一端を目のあたりにした感がある。今回拘留されたメンバーはいずれもロシア国内で長期にわたる研究活動を続けてきた経験をもつが、このような体験は誰もが初めてであった。

東北アジア研究センターをはじめ、ロシアに関わる研究者にとって今回の私の体験については今後適切に対応しなければならないことだと感じ、敢えて仔細な状況を文章にした。我々は強力で信頼する研究パートナーであるロシア科学アカデミーに対し事件直後から詳しい情報を送り続けた。また6人はロシア科学アカデミーに対しGPSの適切な取り扱いについて科学者の立場から対処するよう要請する準備をしている。我々はFSBに対して何ら抗議行動をとるつもりはないし、法律に従ったFSBの取調べ自体には何ら不服もない。2日間の拘留についてウラン・ウデのFSBは謝罪文章を我々に提示している。しかし今回の事件が我々の研究パートナーであるロシア研究者の研究活動を阻み、ロシア社会と科学の健全な成長を妨げる要因になることを科学者として見過ごす訳にはいかない。

AREA REPORT

SIGNAL

ロシアから ▶ ロシアの寒さ

今冬のシベリアの寒さは格別のように、マイナス60度を記録したところもあった。集中暖房が効かず暖をとるべく家で火をおこそうとしてあにく火事が発生し、消防隊が辛うじて放水に成功しても水がすぐに凍って消化に手間取っているという内容のニュースがテレビでも伝えられた。特にこの寒さの中、暖房が十分に供給されていないといわれる沿海州から聞こえてくる情報は憂慮すべきものがある。住民が準備を怠った当局への抗議の印にシベリア鉄道の運行を止めようとして、警官らに阻止されたという事件も起きている。

ロシアでは冬でもアイスクリームが路上で売られている

が、数年前の冬マイナス20度の寒さの中、モスクワの地下鉄にアイスクリームをなめながら入ってきた女の子をみて、待ち合わせていた連中はさすがに驚き、わいわいとひやかしていたのを目撃した。このように寒さには慣れていて強いと思われているロシアの人が、日本にきて異口同音に口にするのは日本の冬は寒い、ということである。北海道は異なるらしいが、日本では集中暖房システムを採用していないからである。そういえば建物の中に入ればロシアで寒さを感じることはほとんどなかった。極端な寒さに襲われることが想定される国ならではの対応策であろう。

(寺山 恭輔)

モンゴルから ▶ モンゴルの雪害状況

本年モンゴル国が、死者4人を出し、250万頭の家畜を失った昨年以上の雪害にみまわれていることは、既に新聞等で報道されている。モンゴル国政府は、既に昨年の段階で国際社会に対して予想される雪害に対する注意を喚起していた。今年の雪害は、モンゴル国ばかりでなく、隣接する中国内モンゴルでも大きな被害を出している。このような中で、生産基盤の脆弱な遊牧に見切りをつけ、定着牧畜へ移行すべきだという主張さえ現れるようになった。今回は、都市部でも危機感が高まっており、地方の牧民援助の募金が行われている。1月14日には国連の災害評価チームが遭難し、19日まで国を挙げて喪に服することが決定された。テレビでは繰り返して犠牲者の紹介と追悼の番組が放

映された。この事件の犠牲者9名には、モンゴルの国会議員でエルデネトの工場長だったSh.オトゴンビグ氏も含まれている。昨年の政権交代で新首相に取りざたされ、今年の大統領選挙にも出馬するのではないかと観測があった重要人物だけに、国民の衝撃も大きいようである。12月31日から翌1月1日にかけてモンゴル中部から東部にかけて吹き荒れた雪嵐等によって、既に8名の死者が出ている。1月末の時点で既に50万頭の家畜が死んでいるが、被害は3～5月にかけてピークに達すると予想され、今年の予想家畜倒斃数は6百万頭とも言われている。モンゴルの遊牧は空前の危機に直面しているのである。

(岡 洋樹)

中国から ▶ 中国の「開々停々」

中国の工場で環境保全装置が実際に稼働されているかどうか訊ねたときの答えが、「三分の一開、三分の一停、三分の一開々停々」であった。つまり動いていたり停まっていたりである。同じようなニュアンスで「環境規制は守られる時もあるし、守られない時もある」とよく言われる。「上に政策があれば、下に対策がある」、「法治ではなく人治」など、中国だと何となく納得してしまうこの手の言葉は少なくない。

ただし、環境意識が低い人も、環境保全のために身を

粉にして働いている人も、そして文字どおり命をかけて抗議している人も中国にはいる。かつて中国で、「中国の環境問題で日本人がお説教するのは許せない。中国人だって一所懸命に努力している。なぜなら、環境汚染で苦しんでいるのは私たち中国人自身なのだから」と言われた。中国や中国の環境問題を分かったような気分で語ってしまうたびに、その人の怒りがこもった真剣な目を思い出しては自戒している。

(明日香壽川)

韓国から ▶ 広がる雇用不安

この度、韓国労働省は企業に対する調査を行い、本年度第1四半期の雇用展望を出した。

同省は常勤者5人以上の企業4,260社を対象にこの第

1四半期の採用計画等に関する調査を実施し、その結果を発表した。それによれば、新規採用計画のある企業は19.1%の819社にとどまり、67.2%の2,883社は採用計画が

無く、また13.7%の588社が未定という。

採用計画のある企業を規模別に見ると、従業員数300-499人を抱える企業が40.5%で最も高く、続いて500人以上の企業が38.5%、100-299人の企業が30.4%、30-99人の企業では24%、10-29人では17%、5-9人では12.1%となっている。また業種別では、製造業が36.8%で最も高い反面、金融業が8.9%と最も低い。

また、経営者たちに直接答えてもらう調査方法（いわ

ゆるBSI）から得られた雇用展望は昨年第2四半期の112.4をピークに第3四半期には110.7、第4四半期には108.7と落ち込んできており、今年の第1四半期には104.1と予想されている。

とはいいいながらも一方では‘人手不足’を嘆く企業が583社（13.6%）にのぼり、‘人手が余っている’とする企業147社（3.4%）より圧倒的に多いのも特徴である。

（成澤 勝）

日本館 便り

nihonkan-dayori

一部の日本人には北方領土問題等の関係で、ロシアを怖い国であると考えている人もおられるでしょうが、文化の受容においてはロシアほど親日的な国も少ないのではないかと私には思われます。ノヴォシビルスクで日本語学習者が年々増えていることは以前にも触れましたが、日本文化の受容は言葉のみにとどまりません。若者に意外と人気があるのは日本の武道です。現在のプーチン大統領が柔道を習っていたこと

とは、昨年の訪日時にテレビを通して伝えられましたが、ロシアでは柔道だけでなく合気道や剣道も人気があり、ノヴォシビルスクでも男女問わず道場で稽古に励んでいます。ノヴォシビルスク市と姉妹関係にある札幌市からは各武道の師範がときどき現地に赴き指導を行っています。剣道につ

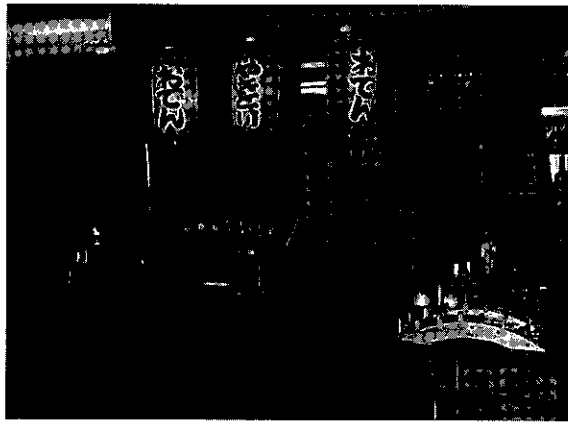
いては毎年モスクワで全国大会が行われています。

最近ロシアで静かなブームを呼んでいるのが日本料理です。日本料理の中でも特に人気があるのが寿司と焼き鳥です。これらの名称はそのままロシア語化されていますので、「Sushi」と「Yakitori」で通じます。ロシアでは鮮魚を生のまま食べる習慣はありませんので、鮮魚を使った寿司を食べるのは、ロシア人には当初抵抗感があったであろうと推測されますが、最近では徐々に定着しつつあります。ノヴォシビルスクでは昨年7月に日本料理

店第1号が、12月には別のオーナーの日本料理店が開店しました。価格は現地の水準からすれば極めて高いのですが頻繁に客が入ってきます。休日ともなると運転手付きの外車で家族揃って食事に来る光景が目につきます。おそらくロシアでは日本料理は代表的高級料理の一つでトレンドイヤーであると考えられているのでしょう。

日本文化受容の新たな流れはアニメーション

（アニメ）とテレビゲームです。ノヴォシビルスク大学には「アニメ研究会」が存在し、米国経由で最先端の日本のアニメをビデオで送ってもらっている学生もいます。これまで大ヒットしたアニメは「セーラームーン」でありロシアの子供達を魅了しました。現在世界で人気を博している「ポケットモンスター」の上



ノヴォシビルスクの日本料理店

陸は時間の問題でしょう。一方、ロシアではゲームセンターが普及しつつあります。置いてあるゲーム機はほとんど日本の「タイトー」や「コナミ」の製品です。ノヴォシビルスクでは空港や市内の映画館でそれらのゲーム機で遊んでいる人々の姿が見られます。日本では若者の欧米化が指摘されますが、ロシアでは若者の日本化が一部で進行しているように思われます。

（塩谷 昌史）

● 最近の共同研究会から ●

◆第10回「古ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証」

徐淵昊・本研究センター客員教授/高麗大学文化大学教授

「東北アジア各民族におけるトーテムの扱い」

・・・朝鮮の場合を中心に・・・

平成12年10月6日(金)

パネラー：丸山宏・本研究センター助教授

成澤勝・本研究センター教授

◆公開シンポジウム

「変動するアジアと地域研究の課題」

平成12年10月14日(土)

明日香諒川 東北大学東北アジア研究センター助教授「アジアの工業化と環境問題」、成澤勝 東北大学東北アジア研究センター教授「10世紀の中国白頭山噴火と文理融合型研究の試み」、大西康雄 アジア経済研究所主任研究員「中国の物流と地域経済圏」、山口博一 文教大学国際学部教授「研究と国際協力のあり方」の講演があった。

◆公開シンポジウム

「21世紀東北アジアの安定と繁栄に果たす日韓の役割」

平成11月10日(金)午後、仙台市国際センターにおいて、東北アジア研究センター主催の公開シンポジウム「21世紀東北アジアの安定と繁栄に果たす日韓の役割」が行われた。徳田センター長の開会の辞と阿部博之・東北大学総長の挨拶に続いて、崔相龍・駐日韓国特命全権大使による基調講演「二十一世紀アジアにおける平和と繁栄のための韓日の役割」があった。外交官であると同時に博士学位を持つ高名な政治学者でもある崔大使の講演は深い学問的蓄積と幅広い教養、そして真摯な人柄が滲み出るもので、聴衆に深い感銘を与えた。

講演の後休憩をはさんでパネルディスカッションが行われた。パネリストは和田春樹・東京大学名誉教授、毛利和雄・NHK解説委員、全民済・チョンコーポレーション代表、



講演する崔相龍・駐日韓国特命全権大使

岡崎智政・河北新報編集次長兼報道部長、太田誠・経団連国際協力本部員の5人である。シンポジウムでは、日韓関係やロシア・中国等のそれを取り巻く諸国の経済・政治情勢、在日韓国・朝鮮人の地方参政権の問題等について、活発な議論が繰り広げられた。ディスカッションの最後に会場の参加者からの質問が受け付けられたが、特に日韓の歴史問題を正面から捉え、青少年たちに考えさせようと努力している教育者の立場からの質問と意見は印象的であった。

◆特別講演会

「中国における地熱利用のポテンシャルと実践例」

平成12年12月8日(金)

本センター主催、資源・素材学会地下計測部門委員会及び東北支部リサイクルエネルギー資源専門委員会共催による特別講演会があり、吉林大学地球物理系の金旭教授「中国の地熱構造と地熱利用」、地熱エンジニアリング(株)企画営業部・部長代理の池内研氏「地中熱利用ヒートポンプによる冷暖房と中国長春市における適用例」の講演が行なわれた。

◆公開学術講演会

「白頭山10世紀の巨大噴火とその歴史効果」

東北大学東北アジア研究センター定例公開講演会が、去る平成12年12月9日(土)に宮城県民会館で開かれました。本年度は文・理両面からアプローチすべく、テーマを『白頭山10世紀の巨大噴火とその歴史効果』として、中国から2名の研究者をお招きしました。お一人は地熱学者・金旭教授(吉林大学)、そしてもうお一人は考古学者・鄭永振教授(延辺大学)です。本研究センター谷口宏充教授の「火山噴火と人間社会」という解説



鄭教授「渤海国は飛躍的に経済成長を遂げた・・・。そして白頭山が・・・?」



金教授「地熱の動態が長白山を語ってくれる・・・。」

に続き、金教授は「長白山(白頭山)火山活動の歴史と現状」について講演され、さらに鄭教授は「白頭山周辺遺跡に見る生活痕」と題し、ちょうど10世紀に姿を消した渤海国の人々の生産生活について語られました。仙台市内外から60人を越える市民の方々が来聴され、最後は活発な質問も多くなされました。

◆講演会

「韓国の干潟：地形学、生態学と人間の利用」

高哲煥 教授(ソウル大学海洋学部)

平成12年12月18日(月)

今年12月より東北アジア研究センターの客員教授としてセンターで共同研究を行っているソウル大学海洋学部の高哲煥(Koh, Chul-Hwan)教授の講演会が開催されました。演者は多くの生物・風景のスライドを用いてお話されました。

●横山隆三(ヨヤマ、リュウジ)教授：岩手大学工学部教授、森林等の資源

【海外から】

●高哲煥(コ、チュルワン)教授：大韓民国、ソウル大学海洋学部教授、環境および文化的側面における干潟

●馬建釗(マ、チェンチャオ)教授：中国、広東省民族研究所所長、中国少数民族の文化と宗教及び中国の民族政策

●劉嘉麒(リウ、カキ)教授：中国、中国科学アカデミー地質学地球物理学研究所教授、中国における活火山の近代噴火史と人間社会

● センター動向 ●

本年1月～3月の東北アジア研究センターの客員研究者をご紹介します。

【国内から】

- 渡邊幸治(ワタベ、コウジ)教授：経済団体連合会特別顧問・元在ロシア連邦日本国特命全権大使、開発と社会変容の研究
- 江夏由樹(イツ、ヨシキ)教授：一橋大学大学院経済学研究科教授、東アジア・北アジア交流論

- 确精扎布(フョインツァブ)教授：中国、内蒙古大学蒙古語文
研究所教授、モンゴル語資料の計算機処理
- 陳春林(チン、シュリン)研究員：中国、廃棄物溶融炉の炉内解析
に関する計算機シミュレーション
- BARINOVA, Anna A. (バリンワ, A. A.)研究員：ロシア、ロシ
ア科学アカデミーシベリア支部細胞・遺伝学研究所研究
員、東北アジア地域における淡水動物の遺伝的多様性に
関する研究

- TARAN, Georgui S. (タラン, G. S.)研究員：ロシア、ロシア科
学アカデミーシベリア支部中央植物園上級研究員、ノア
ーデータを利用したオビ・イルティシ川氾濫原植物群落の分
布構造の解析とデータベースの構築
- ALTANZAYA Laikhansuren(アルタンザヤ, ライハンスレン)研究員：モ
ンゴル、国立師範大学歴史学部歴史社会科学講師、17～18
世紀における西モンゴルの文化・社会に関する研究
(柳田 賢二)

モンゴル文字コードについて

東北アジア研究センター客員教授
/中国内蒙古大学教授

确精扎布
(フョインツァブ)

現在、中国、モンゴル、ドイツ、日本、アメリカ、および台湾等、多くの国や地域で、十数種類に及ぶモンゴル文字のコードが使われている。その大部分は、「文字を構成する要素」と「文字」と「音節」と「二つ以上の文字の組み合わせ」を併せ持った「混合型」のコードである。しかし、それらには重大な欠点がある。それは、コードが統一されていないために資源を共有することができず、何ら変換手順もなく、それらのコードの間でデータをそのまま交換することができないということである。また、多くのコードがモンゴル文字における a/e, o/ö, u/ü, y/ÿ, h/g, t/d 等の「同形異音」字を区別することができず、これでは正確にソートすることも検索することもできない。これは情報処理においては受け入れがたいものであり、モンゴル文字の情報分野の事業の発展に重大な影響を及ぼしている。モンゴル文字の情報処理に於いては、統一され、過不足のない、国際的に通用するモンゴル文字のコードの国際標準を制定する必要に迫られている。

この問題を解決するために、1993年末に中国で少数民族文字コード作業班が組織され、モンゴル文字を含む中国内の各種少数民族の文字コードの作製を開始した。ISO/IEC JTC 1/SC 2/WG 2 も、同時にモンゴル文字コードの専門班を発足させた。爾来、各国の専門家の7年近くの努力と共同作業を経て、ISO/IEC JTC 1/SC 2は、2000年2月15日にモンゴル文字コードの国際標準を採択した。そのコード表は、まもなく ISO/IEC 10646 1 の2000年版に掲載される。

このコードには、次のようないくつかの特徴がある：

第1に、それは伝統的なモンゴル文字、トド文字、シベ文字、満州文字を含み、さらにサンスクリットやチベット語を転写するのに用いられるアリガリ文字等のモンゴル系の文字およびそれに付随する符号や数字および専用の制御コード合わせて155字から成る(図表を参照)。

第2に、上記の各種文字がコードを共有する方式を採用している。これは多くのコード番号を節約することになる。上に述べた各種文字をすべて別のコードで区別した場合、258個のコード番号が必要となる。

第3に、それは「代表字形方式」をとっている。すなわち、ある文字のいくつかの異なった字形のうち、いずれかひとつの形をもってその文字のコードとしている。たとえば、モンゴル文字の A の文字は、語頭、語中、語末連綴、語末分綴、独立形等々、現れる条件により9個の字形をもつ。「代表字形方式」は、このうちの独立形をもって A のコードとする。モンゴル文字で綴る実際の文章における、字形の識別、転送、交換、処理、保存、入力、表示等はすべてこの代表字形で行う。文字のその他の字形は、ディスプレイ表示及びプリンタ出力にのみ用いられ、ISO/IEC 10646 には含まれていない。従って、そのコードを使用する際には、実際にどのような字形が現れるかを決定しなくてはならない。さらに

それぞれの文の中で、代表字形が実際にどのような条件の下にどのような字形として現れるか、その生成規則を決めなくてはならない。

第4に、それは「文字」のコードであって、文字より大きい「音節」や「合字」は含まず、「文字」より小さい「文字要素」も含んでいない。

第5に、モンゴル文字の「同形異音字」は、たとえば独立形で o を表し、語頭形で u を表すといった技術的な処理を行った。その結果、このコードは、同形異音字を完全に区別することができ、正確なソートと検索が可能となった。

第6に、①同じ環境にあって形の違う字形(例：語頭で点のある n と、点のない n)、②単語の中に用いられる字形が、単独で用いられる場合(例：語中の l や語末の b 等を単独で表示する場合)、③単語の部分をそのままの形で分けて綴る場合、いくつかの制御コードが必要となる。モンゴル文字の国際標準コードでは、7つの制御コードを採用している。その内の3つは ISO/IEC 10646 で共有される制御コードである。

このコードは、現在のところひとつの「プラン」であり、計算機上で実現することが必要である。内蒙古大学の蒙古語文研究所と北京大学の方正技術研究院は現在これに基づいたソフトウェアの開発を行っており、ごく近い将来その成果が世に問われようとしている。

Table 48 - Row 18: Mongolian

	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190
0	ᠰ	ᠨ	ᠢ	ᠪ	ᠬ	ᠭ	ᠠ	ᠨ	ᠠ	ᠠ	ᠠ
1	ᠰ	ᠨ	ᠢ	ᠪ	ᠬ	ᠭ	ᠠ	ᠨ	ᠠ	ᠠ	ᠠ
2	ᠰ	ᠨ	ᠢ	ᠪ	ᠬ	ᠭ	ᠠ	ᠨ	ᠠ	ᠠ	ᠠ
3	ᠰ	ᠨ	ᠢ	ᠪ	ᠬ	ᠭ	ᠠ	ᠨ	ᠠ	ᠠ	ᠠ
4	ᠰ	ᠨ	ᠢ	ᠪ	ᠬ	ᠭ	ᠠ	ᠨ	ᠠ	ᠠ	ᠠ
5	ᠰ	ᠨ	ᠢ	ᠪ	ᠬ	ᠭ	ᠠ	ᠨ	ᠠ	ᠠ	ᠠ
6	ᠰ	ᠨ	ᠢ	ᠪ	ᠬ	ᠭ	ᠠ	ᠨ	ᠠ	ᠠ	ᠠ
7	ᠰ	ᠨ	ᠢ	ᠪ	ᠬ	ᠭ	ᠠ	ᠨ	ᠠ	ᠠ	ᠠ
8	ᠰ	ᠨ	ᠢ	ᠪ	ᠬ	ᠭ	ᠠ	ᠨ	ᠠ	ᠠ	ᠠ
9	ᠰ	ᠨ	ᠢ	ᠪ	ᠬ	ᠭ	ᠠ	ᠨ	ᠠ	ᠠ	ᠠ
A	ᠰ	ᠨ	ᠢ	ᠪ	ᠬ	ᠭ	ᠠ	ᠨ	ᠠ	ᠠ	ᠠ
B	ᠰ	ᠨ	ᠢ	ᠪ	ᠬ	ᠭ	ᠠ	ᠨ	ᠠ	ᠠ	ᠠ
C	ᠰ	ᠨ	ᠢ	ᠪ	ᠬ	ᠭ	ᠠ	ᠨ	ᠠ	ᠠ	ᠠ
D	ᠰ	ᠨ	ᠢ	ᠪ	ᠬ	ᠭ	ᠠ	ᠨ	ᠠ	ᠠ	ᠠ
E	ᠰ	ᠨ	ᠢ	ᠪ	ᠬ	ᠭ	ᠠ	ᠨ	ᠠ	ᠠ	ᠠ
F	ᠰ	ᠨ	ᠢ	ᠪ	ᠬ	ᠭ	ᠠ	ᠨ	ᠠ	ᠠ	ᠠ

モンゴル文字のコード表

活 動 風 景

平成12年10月～10月は各種公開講演会、シンポジウム、共同研究会が続いた。10月6日には本センター共同研究会「古ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証」第10回研究会が開催され、「東北アジア各種族におけるトーテムの扱い・・・朝鮮の場合を中心に・・・」について、徐淵昊・本研究センター客員教授/高麗大学文化大学教授が講演を行なった。また、平成12年10月14日には本センターの公開シンポジウム「変動するア

さらに平成12年12月8日には本センター主催、資源・素材学会 地下計測部門委員会共催の特別講演会



日韓の新時代に向けて熱く理想を語る崔韓国大使

「中国における地熱利用のポテンシャルと実践例」が開催され吉林大学地球物理系の金旭教授、地熱エンジニアリング(株)企画営業部・部長代理の池内研氏の発表があった。

平成12年12月9日には公開講演会「白頭山10世紀の巨大噴火とその歴史効果」が開催され、本研究センター谷口宏充教授「火山噴火と人間社会」、吉林大学金旭教授「長白山(白頭山)火山活動の歴史と現状」、延辺大学鄭永振教授「白頭山周辺遺跡に見る生活痕」と題しての講演が行なわれた。

また、センター共同研究会「古ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証」第11回研究会が平成12年12月17日に行なわれ、活発な議論があった。

さらに、平成12年12月18日、本センターの公開講演会「韓国の干潟：地形学、生態学と人間の利用」が開催され、ソウル大学海洋学部高哲煥教授の講演が行なわれた。



ジアと地域研究の課題」が行なわれ、本センター明日香壽川助教授、成澤勝教授、アジア経済研究所主任研究員大西康雄氏、文教大学国際学部山口博一教授の講演があった。

平成12年11月10日には本センター主催の公開シンポジウム「二十一世紀東北アジアの安定と反映に果たす日韓の役割」が行なわれ、崔相龍・駐日韓国特命全権大使による基調講演が行なわれた。

編 集
後 記

2000年10月より2001年1月まで多くの公開講演会、シンポジウムがありながら、私の取材不足で出来上がりが遅くなりました。特に最近のセンター研究活動に関して、公開講演会、シンポジウムの記事と殆ど重複してしまいました。これ、一重に編集委員長の私の責任で申し訳ありません。早くから記事を送られた方々には遅れて発行することになり、申し訳ありません。(北風 嵐)